

ほのぼの

第71号

令和7年

11月

発行 信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3
TEL.078-732-5209



ふまれても ふまれても 精一杯で

前住職

三十年前に経験したことですが、神戸で起きた大地震、足元が揺れて立っておれませんでした。足元がしっかりとないと安心して立つておれないのは人生も同じだと思います。私たちは何を足場にして今を生きるのか。何を基準にして物事を判断するのか。「大丈夫だ」という思い込みだけで安心しているのではなかろうか。危ないですね。

このことを今わが身の上に問うことができなかつたなら、自分をダメ人間にてしまい虚しい心で過ごすことになります。

老若男女、誰でも「自分の思い込みを基準」にして判断をします。しかしこれがあてにならないのです。それゆえ行動に不安がつきまとうのは当然です。

昭和の頃、有名であつた数学者に岡潔という博

士がおられました。この先生に向かって「数学なんかをして人類にどんな利益があるのですか」（なんの役にも立っていないのではありませんか）と問う人がいたようです。これに対して「スミレの花は、ただスミレのよう咲けばよいのであって、そのことが春の野にどのような影響があろうとなからうと、スミレの花のあざかり知らないことだ」と答えたそうです。

私たちにはすぐに分かる成果を求めるがちです。しかし、山の高さはすぐに分かりますが海の深さはすぐには分かりません。浅いところも深いところも同じ水面です。山の高さも海の深さも業績です。すぐに分かるものと、そういうない場合があるのです。

岡先生の返事は、縁あって出会った数学の世界で、自分なりの歩幅で、精一杯の自分のあり方を表現した見事な返事のように感じます。

平々凡々、毎日が同じ」との繰り返しと思いがちですが、昨日は今日ではないし、明日でもない。きょうの一日は一回かぎりの一日です。この世では日々に新たな一日です。新たな一日では新たな自分が、新たな縁と出会う時です。縁は自分でこしらえたではありません。生まれがたい人間に生まれたのも、人や物事に出会うのも与え

られた御縁です。

他人の称讃は自分を成長させる重要な原動力になりますが、逆に無視や蔑視されると辛くなり、みじめです。しかし人は百人百色です。それぞれに勝れた個性があることを忘れてはもったいないことです。生んでもらった甲斐がありません。自分が一番大事にしている自分を捨てることですから。「宝の山」に入っているのだから空手で帰るなよ」と如来さまは仰せられます。

スミレの花はよい評価を期待して咲いているのではない。春のひと時、褒めてくれようがくれまいが、ただ与えられた今の縁を精一杯咲いている。人の一生もこのようにあります。

「ふまれても、ふまれても雑草のように生きる」とを長く生きさせてもらつて教わったことです。生まれがたい人間界にもらつた命です。無駄にはできません。「どう使うか」を考える余裕もなく、自分を自分でダメ人間にしてはいなか。今一度立ち止まって自分自身に問うてみたいことです。

南無阿弥陀仏

旧跡参拝旅行

多田 文男



六月二十六日木曜日、翌日には梅雨明け宣言された最後の雨の日となつたのですが、箕面の勝尾寺を総勢一九名で訪れました。中には少し脚の弱い方もいましたが、傘を差しつつ本堂への坂道を上り、怪我無く無事たどり着きました。

本堂の参拝をすませた後、法然上人ゆかりの二階堂を参拝しました。二階堂では、勝尾寺副住職様に堂内をご案内いただき、安置仏や、上人が滞在しておられた頃の歴史的背景の説明を戴きました。また仏教をはじめすべての宗教に通ずる副住職様ご自身のお考えを拝聴しました。また、最近大阪万博の開催もあってか、沢山の海外の方が訪れているというお話をされました。

この後、美々卯というお店で賑やかに昼食を戴き、次いで池田市伏尾町の久安寺という花の寺としても知られている北摂の古刹を訪れました。境内は丁度紫陽花の花が満開の時で、具足池という人工の池にその切花がたく

さん浮かべられていて、とてもきれいでした。こちらのお寺では住職様が自ら入口の楼門（国指定重要文化財）から一番奥の涅槃仏（六・四m）を祀る仏塔まで、全てを案内してくださいました。仏塔のすぐ横には沙羅双樹の白い花が見事に咲いていました。このころには雨も上がりお日様が照りつけ、汗をかきながらの拝観となりました。午前中の雨は反って暑さをしのげた恵みの雨だったようです。



夏期特別法座に参加して

築島 和恵

午後からは、前住職の法話「真実のことば」。唯仏は真（ただ、仮のみ、これ真なり）について聴聞させていただきました。このように和やかで楽しい一日を過ごすことができ、感謝いたします。日頃は、あまりお話しする機会がなかつた方ともゆつくり交流できました。

お盆も終わり、残暑厳しい八月十八日、信行寺本堂と礼拝堂で法座が行われました。午前十一時から午後四時まで、住職、副住職、前住職と法話が続きます。途中、お昼は皆様とおしゃべりを楽しみながらお弁当を頂きました。

夏期特別法座は、今年で四十三回を迎えます。今年の法題は「真実のことば」です。昼食のあとの休憩中には、住職の長女さんによる仏教童話の朗読がありました。内容は、正信偈の和訳でした。法藏菩薩のお話と住職が奏でる幻想的な音色のシンギングボールがとても神秘的でした。また、副住職による「信行寺の歴史クイズ」。昔の楽しい映像を見ながらいろいろと振り返りました。

その中に前々住職の写真を拝見し、お優しい笑顔がとても懐かしかつたです。



来年もぜひ皆さんをお誘い合わせて、「ご参加ください。よろしくお願ひいたします。

門前の蓮は、私たちを出迎えて下さったのですね。



「仏の世界と私の世界」

夏期法座の法話より④

(厭離穢土)

住職

七高僧の一人である源信僧都はその著「往生要集」において、私たちが生きているこの世界は穢土、つまり煩惱に染まつた迷いの世界であると説かれています。

私たちは日々の暮らしの中で、自分では悪いことをしていないと思っていても、心の奥には「私が正しい」「自分が一番」といった思いが潜んでいます。そうした心が争いや対立の原因になってしまいます。

仏教では六道として、人間・動物・地獄・餓鬼・修羅・天といった様々な迷いの世界が説かれます。どの世界においても苦しみから逃れることはできません。本来であればこうした迷いの世界から離れていたいと願うべきですが、煩惱に染まつた私たちはむしろこの世界に執着をしてしまいます。

このことは蛾の譬えで示されます。夜の灯火にひかれて飛び込み、やがて焼け死んでしまう蛾の姿です。蛾はその光に魅かれて飛び込むのですが、結果として命を落としてしまいます。それはまさに煩惱に引き寄せられ、

知らぬ間に自らを傷つけてしまう私たちの姿です。

また、不求得苦というのも四苦八苦のひとつですが、求めるものが得られない苦しみです。しかも人間は、たとえ望むものが得られたとしても満足できず、さらに欲をつのらせてしまいます。欲には限りがありません。現代の私たちは「欲を満たすことが幸せ」と錯覚していますが、昔の日本人が大切にした「足るを知る（知足）」という心は仏教の智慧からうまれたものなのです。

さらに、五蘊盛苦という苦しみもあります。五蘊とは私たちの身体や心を五つの要素に分けて示したもので、色（身体）受（感覚）想（イメージや概念）行（心の活動）識（認識）です。たとえば、本堂の中ではクーラーが効いていて涼しくて心地よく感じても、一歩外へ出れば、すぐ暑くて苦しみます。同じ自分であっても環境によってすぐに感情は揺れ動いてしまいます。このように、身体や感覚などがあることで快や不快が生じ、それが喜びや苦しみにつながります。「わかっちゃいるけど やめられない」というのも五蘊盛苦です。五蘊があるからこそ生きている実感を得られるのですが、それに執着することで苦しみが生じるのであります。

〈続く〉

法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、十二月の言葉の説明をします。この法語は、村上速水和上の著書からの一節です。



確かなものは

今もはたらきてる

如來の本願力

では、確かなものとは何でしょう。

私達は、毎日同じように過ごしていると、明日も来年もあって当たり前だと感じてしまいます。しかし、よくよく考えてみると思っていた日々は、もう来ないかもしない。明日いや今日身近な人が突然の病気や事故で、もう会えなくなるかもしれない。そういう「いのち」を生きているとわかつているはずなのです。でも、「どこかで他人事のように考えてしまいます。

お念佛申す中で、今もはたらいている如來の本願力に支えられ、寄り添われている人生を歩んでいくのです。

今年は、今までにない猛暑でした。突然の大雨で川が溢れたり、地下の駐車場が水没したりしました。また、民家に熊が現れることが多く、命を失った人もおられます。積み上げてきた知識や経験では考えられないことが起っています。当たり前と思っていたことが「確かなもの」ではありません。思うようにいかないのが当たり前です。

日頃の疑問を考えよう

Q 主人が次男で過去帳がありません。用意しておく必要はありますか？



A 浄土真宗ではお位牌は作らず、過去帳をお仏壇に用意します。過去帳は、先祖の情報を家系図のように受け継ぎ、記録するための帳面です。故人の法名や俗名、命日、行年齢を記載します。

葬儀の際に、お寺から法名などを記載した白木の位牌を用意してもらいます。四十九日の法要までは白木の位牌を使用しますが、以後は記載されている内容を過去帳に転記する流れとなりますので、できればそれまでに用意することをお勧めします。

Q お勤めする際、過去帳はその故人の記載があるページを開けておくのがよいのでしょうか？

A 基本的に、法事やお参りの対象の故人のページを開けるといでしょ。日めくりの過去帳の場合はその日付

のページを開いている方もおられます。毎日、先祖の方々に思いをよせることにもなるでしょう。

しかし、過去帳はあくまでも記録書きであり、供養の対象ではありません。他の宗旨では、位牌＝靈の宿る所という考え方もあるかもしれません。浄土真宗にはありません。ページを開いている故人に對してお経をあげているのではありません。亡き方をご縁として、お経に説かれている阿弥陀仏の本願を聞くことで、生きている私たちが念佛に出遭わせていただくのです。

Q 過去帳はどこで買えますか？

A 一般的に仏壇・仏具店で購入します。日付あり（日めくりのもの）、日付なし（前から順番に記入する）の二種類があります。大きさや材質（布状や木目）も最近はいろいろあります。

記入については、基本的にどなたが書いても問題ありませんが、お寺に依頼する方が多いです。破れたり、汚れたりして気になる方は、新しい過去帳に書き写すとよいでしょう。

信行寺行事予定とご案内

◆報恩講法要

十一月二十三日（土）法話 住職 十一月二十四日（日）法話 前住職

二日間とも午後二時より三時半頃までの予定です。
ご都合に合わせて、一日でもお参り下さい。

◆新春初法座

令和七年一月五日（日）午後二時より

お正月をお寺でお迎えしましよう。
ご一緒に年の初めのお勤めをし、その後、
法話をご聴聞ください



編集委員より

信行寺の「彼岸法要」「報恩講」「定例聞法の集い」などの法座で前住職に直接お会いし、ご法話を「目と耳」で聞かせていただきます。また、お寺発行の「ほのぼの」でご法話を「目」で読ませていただきます。もうひとつは「語り継ぐコトノハ ほのぼのRADIO」を「スマートフォン」から「耳」で聞かせていただきます。それぞれ、聴聞の方法は異なつても阿弥陀様のお慈悲、親鸞様、蓮如様のお言葉を味合わせていただけます。

お寺へのお参りがなかなか難しい方は、年三回発行の「ほのぼの」を是非お読みください。また令和六年四月一日より毎週月曜日に配信され、すでに七十回近くになっている「語り継ぐコトノハ ほのぼのRADIO」はお寺にお参りしなくとも前住職の声が流れ、お話を聞かせていただけます。皆様、ご一緒に聴聞させていただきましょう。

空早苗